

## 『ホテルクラシカル猫番館 横浜山手のパン職人』

小湊 悠貴／著 集英社（2019年）

「日常からの解放」がコンセプトの横浜・山手にあるホテル猫番館には、ホテルの名前からわかる通り、マダムという看板猫がいます。マダムは最高のおもてなしをするホテルにふさわしい美猫で、3時のチェックインの時には必ずフロントで優雅にお出迎えをしてくれます。普段「ニャー」と鳴くことしかしない彼女がなんと、1つのお話が終わる（お客様が帰られる）たびに、Tea Timeという題で猫目線から語ってくれます。



## 『吾輩は歌って踊れる猫である』

芹沢 政信／著 講談社（2021年）

天才はあっという間に凡人を追い越していく。多くの幼馴染のモニカがまさにそういった存在だ。そんなモニカは今や人気ミュージシャンにまでなっている。しかしモニカが失踪したとニュースで流れ、世間を騒がせている。モニカの素行に問題があると思っていたぼくは特に驚きもしなかった。ある日、ぼくがアルバイトから帰ると、ベッドの上に猫が鎮座していた。ぼくが猫を追い出そうとすると、頭の中に声が響いてきた。その声はモニカのもので彼女の説明によるとどうやら呪われてしまったらしい。



## 『獣医にゃんとすの』

猫をもっと幸せにする「げぼく」の教科書』

獣医にゃんとす／著 オキ エイコ／画  
二見書房（2021年）

獣医師で研究員、そして猫の飼い主である著者が、3つの視点から、猫に心身ともに健康でいてもらうための「げぼく」の心得をわかりやすく解説しています。猫と暮らすひとりの「げぼく」として「にゃんとす家ではこうしているよ」という話を織り交ぜながら書かれており、飼い主さんの日々の悩みや疑問を解決するような内容になっています。「このおうちにきてよかった」と愛猫が感じてくれるような毎日にしてあげたいですね。



## 『旅猫レポート』

有川 浩／著 文藝春秋（2012年）

ナナはかしこくてしたたかなオス猫。元は野良猫でしたが、車にひかれてケガをしたところを助けられたことがきっかけで、人間のサトルと暮らすようになりました。しかし五年後、サトルはとある事情でナナを飼い続けることができなくなってしまいます。引き取ってくれる相手を探さなければいけません。サトルはナナと一緒に銀色のワゴンに乗って、信頼できる友人たちのもとに向かいます。果たして引き取り先は見つかるのでしょうか。一人と一匹の、最後の旅のはじまりです。



## 『こいぬとこねこのおかしな話』

ヨゼフ・チャペック／作 木村 有子／訳  
岩波書店（2017年）

むかし、森の近くの一軒家に、こいぬとこねこがくらしていました。こいぬはすこしおとぼけの男の子で、こねこはしっかり者の女の子です。ふたりは、人間のように掃除をしたり、ケーキを焼いたりします。失敗するときもありますが、ふたりは毎日ゆかに暮らしています。本書は作者ヨゼフ・チャペックの生前最後の本と言われています。ヨゼフ・チャペックは、第二次大戦中にナチスに捕らえられ、獄中死をとげたという悲しい背景があります。



## 『もみじの言いぶん』

村山 由佳／著 ホーム社（2019年）

作家・村山由佳の“ご主人様”である猫のもみじ。下僕であり、かーちゃんでもある村山由佳との愉快的な日常をもみじが軽快な関西弁でたくさん写真とともにご紹介します。楽しかったとき、悲しかったとき、腹立たしかったとき、嬉しかったとき、そしてお別れのとき……。どれも忘れ難く、愛おしい記憶ばかり。生まれ変わって新しい毛皮を着たもみじとまた会えることを願って17年間大切な思い出を振り返ります。

